都留文科大学研究紀要　第71集（2010年３月）
The Tsuru University Review, No.71 (March, 2010)

「歯車」を読む

A Study of Akutagawa-Ryunosuke's *"Cogwheels"*

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

一　世界文学入りした「歯車」

「歯車」（遺稿）は、芥川龍之介最晩年の力作である。わたしはこれまで「歯車」というテクストに関して、成立事情も含めていくつもの論文や著書でふれてきた。「〈滅び〉への道―「歯車」―」[1]や『芥川龍之介とその時代』[2]での言及は、その代表である。が、研究は絶えず進展する。特に冷戦後の世界情勢の変化は、芥川という作家のテクストを新たな視点で捉え直そうとしている。世界四十か国を上回る国々での芥川作品の翻訳は、この作家を、そしてこの作家の残したテクストを再検討・再確認させることになる。「歯車」も例外ではない。

冷戦後の芥川を含めた日本文学研究は、欧米から東アジアへと急展開した。早く日本に学べ、日本を追い越せを国是として韓国では、一九六五（昭和四〇）年の日韓国交正常化以降、大学や専門学校に日本語・日本文学関係の学科が急速に増える。そうした中で芥川のテクストは、日本語の教材としても用いられるようになる。むろんそれらは物語性の強い王朝物の「羅生門」であり、児童文学の「蜘蛛の糸」であったりする。

事は中国でも同様である。中国の日本語や日本文学研究は、韓国よりも遅れて一九七八（昭和五三）年の日中平和友好条約の締結以後のことである。第二次世界大戦後、文化大革命時代が過ぎ去るまでは、日本語を学ぶことなどできなかった。一九八〇年代になってようやく日本語学習熱が高まり、九〇年代にピークを迎える。そうした中で芥川テクストの新訳が試みられるようになる。

『日本近・現代文学の中国語訳総覧』[3]の著者康東元（カンドウウンウエン）は、「八〇年代末から九〇年代を経て現代にいたる中国社会の変化と日本文学の翻訳状況との関係は、中国社会の変化、つまり経済的な発展に伴う

「豊かさ」の実現に深く関係していることが分かる。また、それは中国文学及び中国での文学受容が「世界文学化」してきたことでもある」と言う。芥川文学は世界文学として評価されるものを持つ。中でも「歯車」には、近代に生きる誰もが直面しなければならない深刻な問題が託されているだけに、再評価の余地が大きい。

嶌田明子の労作「著作外国語訳目録」[4]によると、中国での「歯車」の翻訳は、戦前の一九二八（昭和三）年に、早くも沈端先が『東方雑誌』25-21、22に載せており、戦後は一九六七年に葉笛が『文学季刊』5に載せたのが最初のようだ。康東元の右の書には、中国語に翻訳されたテクストの「作家順一覧」が添えられている。それによると「歯車」は、一九九一年に出る呉樹文の訳、『小説集―「疑惑」他』（上海訳文出版社）に翻訳され、一九九八年に呂元明他編の『芥川龍之介作品集』（北京中国世界語出版社）にも「歯車」の中国語訳は収録されている。が、芥川の他の作品に比べると翻訳の頻度は低い。それは物語性に富んだ作品と異なり、近代の神話的構造を持つ小説によるからなのであろう。

が、そこにこそ本テクストの世界文学的要素がある。また、ドストエフスキーやストリンドベルク、ダンテの「神曲」、さらには聖書やギリシャ神話を踏まえたテクストの世界は、まさに世界文学の様相を呈するし、イデオロギーから解放された冷戦後の世界の人々の心に訴えるものがあったのである。

冷戦後、韓国でも「歯車」は注目されはじめ、訳者の異なるいくつもの翻訳が出る。河泰厚・金明珠・曺紗玉ら日本語でも論文を書く研究者が、自国の研究誌にその研究成果を示すこととなる。河泰厚の「「歯車」小考」（『大邱専門大論文集』12、一九九一・二）、金明珠の「芥川龍之介「歯車」試論」（『日語日文学8、一九九七・一二）、曺紗玉「死に至る狂気と絶望―芥川龍之介の「歯車」を中心に―」（『日本学報』第40輯、一九九八・五）などである。

英語圏でも、「歯車」は*Cogwheels*の題名で、複数の翻訳がある。最新の翻訳は、ペンギン・クラシックス・シリーズの一冊として出たジェイ・ルービンの『羅生門」ほか17篇』[5]に収められたものがある。ルービンはこの訳書の解説「芥川龍之介と世界文学」で、「地獄変」が芥川の初期の傑作ならば、後期の傑作はまちがいなく「歯車」だ。「或阿呆の一生」全編がなす断片化された物語とは違って、「歯車」では全生涯が苦悩に満ちた強烈な数日間に煮詰められている」（畔柳和代訳による）と断言する。

「歯車」は現在、日本はもちろん、洋の東西を越えて読まれている。それは冷戦後、より顕著となった現象である。以下にその世界を見ていくこととする。

二　執筆時の背景

「歯車」は、四百字詰原稿用紙にして、約七十七枚ほどの作品である。生前の一九二七（昭和二）年六月号の雑誌『大調和』に「一レエン・コオト」だけが、章題なしに掲載された。没後、自筆原稿に基づき、全文一～六が遺稿として同年十月号の『文藝春秋』に載った。自筆原稿および『文藝春秋』発表のものには、それぞれの章の脱稿日が記入されている。各章のタイトルと章の末尾に記された年月日、それにおよその枚数は、以下のようである（括弧内表記は、芥川の記載どおり）。

一　レエン・コオト（昭和二・三・二三）　十五枚
二　復　讐（昭和二・三・二七）『文藝春秋』には記入なし　十四枚
三　夜（昭和二・三・二八）　十二枚
四　まだ？（昭和二・三・二九）　九枚
五　赤　光（昭和二・三・三十）　十五枚
六　飛行機（昭和二・四・七）　十二枚

テクスト「歯車」（七七枚）の執筆速度は、右の記録をそのまま信じるとかなり速い。

「一　レエン・コオト」に何日かけたかは想像の域を出ないものの、「六　飛行機」は「五　赤光」を書きあげたのち八日の間隔がある。問題は「二　復讐」から「五　赤光」までの五十枚を四日間で書き上げていることだ。一般には遅筆で知られた作家であるだけに、このような数字を前にすると驚いてしまう。平均すると一日十二枚半である。それゆえ、当時田端の芥川家の世話になっており、晩年の芥川に深くかかわった甥の葛巻義敏のように、「作られた日付」[6]を強調する論者もいるほどである。

けれども、一方で整備された現全集に収められた、遺稿を含めた一九二七（昭和二）年の芥川の総原稿枚数から推して一日十枚強という執筆枚数は、決して無理なものではなかったことも指摘できるのである。それよりも最後の年となった一九二七（昭和二）年前半に、芥川に降って湧いた強烈な創作エネルギーが、どこにあったかの解明が必要なのである。そこでまずは「歯車」執筆当時の背景が問われねばならない。

芥川龍之介が「歯車」を執筆した一九二七（昭和二）年は、あわただしい幕開けをした。前年十二月、彼は神奈川県の鵠沼海岸に、妻文と三男也寸志と滞在、静養と執筆に携わっていた。が、健康は思うようにはならず、執筆もはかどらなかった。十二月二日付で佐佐木茂索宛に出したはがきの一節に、龍之介は「鴉片（アヘン）エキス、ホミカ、下剤、ヴェロナアル、――薬を食つて生きてゐるやうだ」と書き、翌三日付の同人宛はがきでは、「僕は暗タンたる小説を書いてゐる。中々出来ない。十二三枚書いてへたばつてしまつた」と記している。ここに見られる「暗タンたる小説」とは、翌年（一九二七）一月号の『中央公論』に一、二の章のみが載り、二月号に一、二も再録して全章が掲載された「玄鶴山房」である。当初は一月号に一挙掲載のはずだったが、意外と手こずったことになる。

十二月四日付の斎藤茂吉宛書簡には、「オムピア毎日服用致し居り、更に便秘すれば下剤をも用ひ居り、なほ又その為に痔が起れば座薬を用ひ居ります。中々楽ではありません。しかし毎日書いて居ります」とあり、『中央公論』の編輯人の高野敬禄には、「昨夜は二時過ぎまでやつてゐたれど、薄バカの如くなりて書けず」（一九二六・一二・一六付）と書き送るほどであった。鵠沼で静養しながら芥川が書いていたのは、「玄鶴山房」ばかりではない。他に「萩原朔太郎君」「鬼ごつこ」「僕は」「彼」「彼 第二」「或社会主義者」などがあるが、「玄鶴山房」は内容からも分量（約四八枚）からも際だっている。

大正天皇が没し（一九二六・一二・二五）、昭和と改元された日、芥川は「打ち下ろすハンマアのリズムを聞け。あのリズムの存する限り、芸術は永遠に滅びないであらう」（『侏儒の言葉』遺稿、「民衆 又」）と記している。彼は新しい文学に期待しながら、人間にまつわる諸

問題に苦しんでいた。二日後の暮れの二十七日、妻の文が正月の準備のため、也寸志を伴い、鶴沼から田端の家に帰る。龍之介も正月は田端で迎えるはずであった。が、大晦日になっても彼は帰らなかった。これは〈小さな家出〉（小穴隆一）とされる事件である。芥川文述・中野妙子記『追想 芥川龍之介』[7]には、このことに関する以下のような証言があるので引用しよう。

大晦日に帰るという主人が、正月になっても帰りません。心配していますと、正月の二日になって、家へ帰ってまいりました。

体の具合が悪くなって、三十一日に鎌倉の小町園へ行って静養していたそうです。

小町園の女主人は、ときどき私も相談に行ったりする賢い夫人でした。

「あの時の先生はお帰し出来るような顔色ではありませんでした」

と言っておりました。

それから主人は、もう鶴沼へは行けませんでした。

鎌倉小町園は東京築地の小町園の支店で、池のある広い庭が自慢の料亭であった。龍之介は海軍機関学校在職中から、知人の接待にここを利用していた。女主人の野々口豊（豊子とも記された）は賢い女性であった。『保儒の言葉』（文藝春秋社出版部、一九二七・一二）（豊子ども記録）の遺稿部分に出て来る「ある女」が豊だとされるのも、二人の親しい関係からしても肯けるところだ。文は予定の大晦日に帰らず、一九二七（昭和二）年の年明けの二日に、気まずい思いで帰った龍之介を責めることなく黙って迎えた。

文は三人の幼い子どもを抱え、さらに三人の老人（養父母と伯母フキ）の世話とで疲れており、夫龍之介の新年になってからの帰宅を責めようとの気はさらさらなかった。彼女はそれよりも夫の体が心配だった。一緒に生活していて気づくことは、食が細く、体が痛せて来ていることであった。鶴沼にいた時は、散歩さえ一人ではできず、幻覚におびえることもしばしばだった。それ故、予定の大晦日に帰らなかったのを責めることなど出来なかったのである。

芥川龍之介はこのような状況の下で、新年を迎えた。生存最後の年である。ここに思いもかけない事件が起きる。すなわち、いまだトソ気分も抜けない一月四日の正午過ぎ、東京市芝区南佐久間町の龍之介の姉ヒサの嫁ぎ先西川豊の家が、失火により二階の書生部屋が焼けた。小火（ボヤ）である。続いて火災保険がかけてあったことから放火の嫌疑を受けた西川が、六日の午後六時五十分、千葉県山武（さんぶ）郡の土気（とけ）トンネル付近で鉄道自殺を遂げる。以後龍之介は、この事件の処理というか、後始末に〈忙殺〉されることとなる。

これまで、そして今でも、いくつもの芥川年譜や芥川伝は、西川家の火事を全焼としているが、わたしは『芥川龍之介とその時代』以後、西川の子で龍之介の長男比呂志と結婚した芥川瑠璃子の二冊の回想記[8]の記述に従い、半焼、もしくは小火と訂正している。当事者の詳しい証言に、真実を見出したからである。研究者の芥川伝の記述には、今に至っても誤りが多い。

自殺した西川豊は、すでに偽証教唆によって弁護士失権中であった。しかも家には大金の火災保険（当時の『東京朝日新聞』によると

「帝国火災保険会社」へ一万円の保険とある）が掛けられており、さらに焼け跡から大晦日に窓硝子を拭いた時に用いたアルコール瓶が発見されるという不運が重なり、放火の嫌疑がかけられ、警察の調べを受けたのである。大正天皇の大喪の恩典によって、弁護士資格が復権しようとしていた矢先のことだっただけに、西川はこれですべてがダメになったと考え、失意のうちに死に赴いたのである。一九二七（昭和二）年一月八日の『東京日日新聞』は、「放火の嫌疑を受けて／弁護士自殺す」との見出しで、芥川龍之介の義兄の死を大きく報道している。

芥川が西川豊の死を知るのは、一月六日の夜のことである。「歯車」の「一　レエン・コオト」に、そのことに関する記述があるので引用しよう。

そこへ突然鳴り出したのはベツドの側にある電話だつた。僕は驚いて立ち上がり、受話器を耳へやつて返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だつた。

「何だい？　どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、……大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ。」

電話はそれぎり切れてしまつた。僕はもとのやうに受話器をかけ、反射的にベルの釦（ぼたん）を押した。しかし僕の手の震へてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。給仕は容易にやつて来なかつた。僕は苛立たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの釦を押した、やつと運命の僕に教へた「オオル・ライト」と云ふ言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れていない或田舎に轢死（れきし）してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひつかけてゐた。

テクストの解釈は、作者の現実に還元することではないものの、作者の現実が〈転位〉されていることがはっきりしている「歯車」などは、それを知っていると理解は深まる。が、右の箇所の「僕の姉の娘」に注解を施し、「実姉ヒサの娘、瑠璃子（のち長男比呂志の妻）か」としているのをまま見かけるが、いただけない。「僕の姉の娘」は瑠璃子ではなく、ヒサが最初の夫葛巻義定との間にもうけた、一九一〇（明治四三）年十一月二十八日生まれの葛巻さと子である。さと子は西川家で養われていたのである。「僕」とのやりとりからしても、幼い瑠璃子ではなく、当時満十七歳の娘であったさと子としなくてはならない。ちなみにさと子の兄の葛巻義敏は、芥川家で養われていた。

姉ヒサの夫、西川豊の自殺事件は、「歯車」の「二　復讐」にも描かれる。そこには「姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙つてゐた。それも亦実際仕かたはなかつた。彼は家の焼ける前に家の価格に二倍する火災保険に加入してゐた」とある。

姉一家の不幸な事件は、芥川龍之介をも巻き込む。先にわたしは

「一九二七年前半に、芥川に降って湧いた強烈な創作エネルギーが、どこにあったかの解明が必要」との一文を書き込んでいる。わたしはこの時期の芥川の創作エネルギーは、一に西川豊の自殺事件とその後始末にあったと考える。やり切れない思いが創作に昇華されるのである。

若き日の芥川は、自己を語るのを嫌った。けれども彼は、常に人生におけるやり切れない思いを創作に〈転位〉していたのである。初期の代表作の「羅生門」は、失恋事件での養父母や伯母フキとの対立、反逆の思いが古典の世界を借りて表現されている。また、「地獄変」では、絵師良秀の精進に、当時の己の闘いが反映している。彼には〈家〉や〈文壇〉や〈時代〉や〈古き自分〉との絶えざる闘いがあった。それをテクストの主人公の歩みに〈転位〉させていたのである。が、「歯車」には虚構を十分に生かして現実を〈転位〉する再創造の世界はない。現実が十分虚構化されず、時に生のまま表現されるのだ。それを支えるエネルギーは、再説するが西川豊の自殺事件の後始末にあった。

事件は、芥川を人生の傍観者にはさせず、彼をも巻き込んで展開する。当時の芥川家の戸主龍之介には、妻と三人の子ども（比呂志・多加志・也寸志）のほかに養父道章・養母儔、伯母フキがおり、他に姉ヒサの子である葛巻義敏を預かっていた。前述のように、ヒサには前夫との間に二人の子がおり、再婚した西川と折り合いが悪かった義敏を龍之介が引き取ったのである。この時点で八人の扶養家族がいたことになる。それに加えて、今度は姉一家（ヒサ・瑠璃子・晃）と姉の家にいた前夫との間の子葛巻さと子の面倒も見なければならない。扶養家族は何と十二人に及ぶ。これは大変な財政的負担である。さらに西川は高利の借金を抱えていて、その対策も講じなければならなかったのである。

当時の芥川書簡に、事件に対処する芥川の苦悩を読むことが出来る。なにせ姉ヒサは、一方的に龍之介に頼ってくる。否、頼らざるを得なかったのである。それも致し方ないことであった。頼れるのは弟の龍之介一人だったからである。龍之介の奮闘を語る書簡を、日を追って書き抜いておこう。「歯車」執筆の背景を知ることが出来るからである。

「その後又厄介な事が起り、毎日忙殺されてゐる」（宇野浩二宛、一九二七・一・九付）、「唯今東奔西走中。何しろ家は焼けて主人はゐないと来てゐるから弱る」（藤沢清造宛、一九二七・一・一〇付）、「親族に不幸出来、どうにもならぬ。唯今東奔西走中だ」（佐藤春夫宛、一九二七・一・一二付）、「又荷が一つ殖えた訳だ。神経衰弱癒るの時なし。毎日いろいろな俗事に忙殺されてゐる」（南部修太郎宛、一九二七・一・一二付）、「大騒ぎがはじまつたので、唯今東奔西走中です。神経衰弱なほるの時なし」（伊藤貴麿宛、一九二七・一・一五付）、「親戚中に不幸起り、東奔西走致しをる次第」（斎藤茂吉宛、一九二七・一・一六付）などで、芥川は事件の対策に走り回る自身の姿を浮き上がらせている。

それまで世俗には疎かった芥川ではあるが、「俗事に忙殺され」る中で、実生活上のいろいろな仕組みを覚えることとなる。とにかく姉ヒサの嫁ぎ先西川家の後始末は、「火災保険、生命保険、高利の金などの問題がからまるものだからやりきれない」（佐佐木茂索宛、一九二七・一・三〇付、消印三一）ものがあった。が、芥川は得意の数字をころがし、俗事と闘う。

彼は誠実に、戸主に先立たれた姉ヒサ一家のために、面倒な仕事に当たった。もともと頭のよい彼のこと、俗事へは素早い対応ができた。諸事の煩瑣な手続きも、飲み込みは早かった。親族会議は連日開かれ、対策がなされた。けれども、実家新原家にはかつての力はなかった。実父敏三の死後、家督は龍之介の腹違いの弟、新原得二が継いだが、得二に事業の経営能力などなかった。新宿の牧場は早く人手に渡っており、芝区新銭座町の家さえ売られていた。そういうこともあって、夫を失ったヒサ一家の経済的支援は、人気作家と見なされていた龍之介に回ってくるのであった。それを誰もが当然と見なしたのである。

姉一家の不幸を全身に背負って、彼は奮闘する。が、後始末は長引く。「僕は姉の亭主の債務などの事を小説に書く間に相談してゐる。年三割の金と云ふものは中々莫迦に出来ないものだよ」（佐佐木茂索宛、一九二七・二・一一）、「その後姉の家の生計のことや原稿の為にごた〳〵してゐる」（小穴隆一宛、一九二七・二・一二付）の書簡が語るように、二月の半ばになっても事は解決していない。

芥川最晩年の創作活動は、こうした状況の中で行われている。彼は必死になって創作と格闘する。それは田端の芥川家はもちろん、姉一家の為でもあった。豊かだった養父の蓄えも、家の新築や維持管理や交際費用や趣味などで落ち込み、今は龍之介の収入が当てにされるようになっていたのである。彼はペンを握りしめて机に向かう。とにかく書く以外に苦境を逃れる道はなかったのである。

一九二七（昭和二）年一月十九日、それまで執筆に難渋していた「玄鶴山房」を書き上げると、彼は次の仕事に取りかかる。当時の執筆状況は、「唯今「海の秋」と云ふ小品を製造中、同時に又「河童」と云ふグァリヴァの旅行記式のものをも製造中、その間に年三割と云ふ借金（姉の家の）のことも考へなければならず、困憊この事に存じ居り候」（斎藤茂吉宛、一九二七・二・二付）との便りに見ることができる。

くり返すが、不幸な事件は、創作を生む厖大なエネルギーと化したのである。書くことは、芥川龍之介にとって今や救いともなっていた。生存の意味を問いつつ、彼はせっせと原稿用紙のマス目を埋めていく。同年二月七日付弟子筋の蒲原春夫宛便りには、「僕は多忙中ムヤミに書いてゐる。婦人公論十二枚、改造六十枚、文藝春秋三枚、演劇新潮五枚、我ながら窮すれば通ずと思つてゐる」とある。「婦人公論十二枚」というのは、当初「海の秋」の題を用いて書いていた「蜃気楼」である。瀧井孝作宛書簡（一九二七・二・二七付）で、「玄鶴山房」「河童」と比較し、「一番自信を持つてゐる」と言い、斎藤茂吉宛書簡（一九二七・三・二八付）でも、「婦人公論の「蜃気楼」だけは多少の自信有之候」とされている。「文藝春秋三枚」というのは、「軽井沢にて」という随筆、それに「演劇新潮五枚」は「芝居漫談」、「改造の六十枚」が「河童」に相当する。

三　ソドムの夜

姉一家の不幸の後始末のほかに、当時の龍之介を悩ましたのは、健康の衰えであった。一九二一（大正一〇）年、大阪毎日新聞社の特派員として約四か月、中国各地を訪れた彼はさまざまな体験をし、社会や人生を見る目や歴史認識は格段に成長した。が、強行軍の旅程は彼に無理を強い、そう頑健でもなかった体には異常が生じるようになる。

北京で胃を悪くしたのは、その後長くたたった。脂っこい中華料理は、和食で育った龍之介には向かなかった。帰国後一か月余、健康の回復のはかばかしくないことを歎き、「小生の胃腸直らずその為痔まで病み出し床上に机を据ゑて書き居る次第この頃では痩躯一層痩せて蝙蝠の如くなつてゐます」（薄田淳介宛、一九二一・九・八付）とか、「この間の下痢以来痔と云ふものを知り　恰も阿修羅百臂の刀刃一時に便門を裂くが如き目にあひ居り」（下島勲宛、一九二一・九・一三付）とか、「私は現在四百四病一時に発し床上に呻吟してゐます」（森林太郎・与謝野晶子宛、一九二一・九・一四付）といった書簡が残されている。その後没年に至るまで、その健康は回復しなかった。

一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災は、芥川に大きな衝撃を与えた。田端の芥川家は東京の北の台地にあり、しかも新築後十年も経ないという好条件が幸いし、「被害は屋瓦の墜ちたると石燈籠の倒れたるとのみ」（「大震前後」『女性』一九二三・一〇）という状況であったものの、芥川は東京各地をめぐり、その惨状を目撃していた。大地震は火災を伴っていた。当時刊行された『大正大震災大火災』[9]という本のタイトルが示すように、災害は震災と火事双方を含んでいた。この本の「大火災記」の「五　猛火の旋風死人の山」には、以下のような、神によって滅ぼされた古代都市ソドムの夜の状況に近い描写がある。引用しよう。

大火当夜の光景程、恐ろしきものは此の世にかあるまい。最初、地震と同時にそこゝに発火した時には、眞逆斯程の大火にならうとは、何人も想像だもしてゐなかつた。と、日比谷の一角に揚がった火炎は先づ警視庁を舐め、帝劇を焼き、一方数寄屋橋を越えて銀座を襲つたのであつた。此の時、既に火は市中至る所に燃え上り、濛々たる黒煙天日を罩めて昼なほ暗く、煙を透く太陽の光は血よりも赤かつた。黄昏と共に風勢加はり、紅蓮の舌は、きらめく星を焼かんとし、渦巻く旋風は、めら〳〵と燃え上る数十丈の炎を、引つかんで地上にたゝきつけ、それよりそれへと燃え拡がるのであつた。風下に飛ぶ火の子の凄じさ、その中を打ち群れて、泣き叫びつゝ逃げ走る避難者の潮の如き流れ、背の荷に、いつか火の子が落ちて、燃え出したも知らずに、当てもなく走りつゞける哀れさ、恐らく、あの瞬間を見たならば、鴨長明が再来したとて、筆を擱くよりなかつたであらう。

旋風は火元の多かつたと相俟つて、随所に死人の山を築いたのであつた。地震で倒れた家屋の下敷きとなつて、生きながら焼かれたのは、骨さへ解らずになつてしまつたが、街上にゴロゴロ倒れて居る死体だけでも、夥しい数、殊に本所の被服廠跡の三万三千をはじめ、両国、浅草橋、阪本等の小公園は、却つて避難者の蒸し殺し所となつた。更に、猛火に逐はれて隅田川に落ちて死んだ者、永代其の他の橋と共に焼け落ちたもの、吉原の池、安田、岩崎両家の池などで、池水が湯となり、章魚の如く煮られて死んだもの、それ等に至つては、果して幾千あつたか、想像する事も出来ぬ。災後七日を閲みするも、隅田の流れに浮ぶ死人は失せなかつた。当時、昼の地震の恐ろしさはいつか忘れ、一に、火事をのみ恐れおのゝいたものゝ多かつたは、無理からぬ処であらう。

芥川龍之介は関東大震災に際し、十もの記録を各雑誌に発表している（小著『芥川龍之介とその時代』に一覧を掲げている）。同時代作家で大震災・大火災の記録をこれほど多く書いた人はいない。彼は震災後の東京各地を歩き、震災記をものした。芥川はこの時点で、右の引用にも見られるソドムの夜を体験していたのである。

ソドムはゴモラとともに『旧約聖書』の「創世記」に出て来るイスラエルの低地にあった都市の名である。悪徳の栄えた都市で、神によって滅ぼされたとされる。「創世記」19章24～25節には、「主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を町の全住民、地の草木もろとも滅ぼした」（新共同訳による）とある。ソドムとゴモラの滅亡に関する記事は、多少とも聖書に親しんだ者なら、誰しも記憶するところだ。それは悪の象徴として扱われる。「エレミヤ書」23章14節の「彼らは悪を行う者の手を強め／だれひとり悪から離れられない。／彼らは皆、わたしにとってソドムのよう／彼らと共にいる者はゴモラのようだ」（新共同訳による）という聖書の記事も思い出される。一高時代から聖書に親しんでいた芥川は、聖書の神の罪悪に対する審判の激しさに接し、身につまされる思いであったろう。

第一次世界大戦は、日本に漁夫の利をもたらした。戦争は四年半に及んだが、その間、日本の経済は大きく成長した。貿易額は飛躍し、輸入超過国は一転、輸出超過国となった。海運業は飛躍的に進展し、船成金が出現した。各地の都市は活況を帯びた。特に首都東京の繁栄は、ことばには言い尽くせないものがあった。が、都会の繁栄の裏には、多くの罪悪もはびこっていた。芥川はそれを鋭く見抜く。それが彼のいくつかの小説にも取り込まれている。「歯車」という絶筆もその一つであった。

ところで、『大正大震災大火災』の記事にも見られる震災で猛火の犠牲となった「本所の被服廠跡」や両国・隅田川などは、本所小泉町で幼少年期を過ごした芥川龍之介と深いかかわりのある場であった。そこが壊滅的打撃を受けたのだから、大震災は芥川にソドムの滅亡にも等しいものを感じさせたのである。右に引用した記事の「池水が湯となり、章魚の如く煮られて死んだもの」が「幾千」もあったという「吉原の池」を、芥川が見に行ったことは、川端康成の「芥川龍之介と吉原」[10]に出て来る。その一節には、「吉原遊郭の池は見た者だけが信じる恐ろしい「地獄絵」であった。幾十幾百の男女を泥釜で煮殺したと思へばいい。赤い布が泥水にまみれ、岸に乱れ着いてゐるのは、遊女達の死骸が多いからであつた」とある。まさに「地獄絵」の描写だ。芥川の「大震雑記」（『中央公論』一九二三・一〇）には、「浅草仲店の収容所にあつた病人らしい死骸」について詳しく書いた文章もある。

大震災・大火災から五年目の一九二七（昭和二）年の新年を迎えた芥川龍之介は、死を自覚していた。身体の衰えは隠しようがないほどだった。その上に姉一家の事件の後始末が、舞い込んだのである。「歯車」はそうした彼を取り巻く地獄的現実を恐怖と不安にかられながら、「デフォルメや誇張ではなく、むしろ抑制」[11]して描くことによって、より深刻な世界を現出させるのである。彼は〈死〉や〈滅び〉を意識して、「世紀末の悪鬼」に虐（さいな）まれながらその日暮らしの生活をしてゐた」（「或阿呆の一生」）。「歯車」執筆前年の秋、神経衰弱はより昂進する兆候が見られた。それは当時の書簡が語る。

当時滞在中の鵠沼海岸から出した便りには、「僕の頭はどうも変だ。朝起きて十分や十五分は当り前でゐるが、それからちよつとした事（たとへば女中が気がきかなかつたりする事）を見ると忽ちのめりこむやうに憂鬱になつてしまふ」（佐佐木茂索宛、一九二六・一〇・二九付）とか、「胃腸は略々旧に復し候へども神経は中々さうは参らず先夜も往来にて死にし母に出合ひ、（実は他人に候ひしも）びつくりしてつれの腕を捉へなど致し候。「無用のもの入るべからず」などと申す標札を見ると未だに行手を塞がれしやうな気のすること少からず、世にかかる苦しみ有之べきやなど思ひをり候」（斎藤茂吉宛、一九二六・一一・二八付）とかある。往来で死んだ母に出合って驚くという異常な体験は、茂吉に当てた便りの翌日付の佐佐木茂索宛便りにも見られる。

こういうプライバシーに属する自己の弱点をあえて人に語るほど、芥川の病状は悪化していたのである。茂吉は龍之介の薬の調合をしていた医者だからまだしも、後輩、否、弟子とも見なされていた佐佐木茂索にまで語るとは、尋常でない。さらに「この頃又半透明なる歯車あまた右の目の視野に廻転する事あり、或は尊台の病院の中に半生を了ることと相成るべき乎」（斎藤茂吉宛、一九二七・三・二八付）という便りもある。これは「歯車」の「一　レエン・コオト」の記述に、「のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？――と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の歯車だつた」とあるのに対応する。「歯車」では、この現象が以後何度も書き込まれ、主人公の不安と恐れの代名詞化されていく。「尊台の病院」とは、当時茂吉の経営していた旧赤坂区青山南町の青山脳病院を指す。

主人公の視野を遮る「半透明の歯車」については、早く眼科医の椿八郎が「「歯車」と眼科医」[12]で、閃輝暗点という眼疾患であるとし、松本清張がそれを踏まえて、芥川の技巧に言及している。[13] 芥川が歯車症状を閃輝暗点という眼科的病状と知っていた、いないは別として、このような病状をも含めた弱った肉体に加え、「あらゆる罪悪を犯してゐる」自身を意識せずにはいられぬ精神的負担もまた限界に達していたのである。

「歯車」というテクストの表題は、友人佐藤春夫の勧めであることは、佐藤自身の証言もあって広く知られている。佐藤は「芥川龍之介を憶ふ」[14]の終わりの箇所で、「歯車」にふれて以下のように書いている。

――歯車と云へばあの作品はアルス児童文庫のことで自分が訪ねた時彼が机辺からその最初の一章を取り出して自分に見せたものだ。その時題は「夜」と書いてあつた。その上に二三字消した跡があるので自分はそれを見てゐると彼は題が気に入らぬかと云つた。さうして消してあるのは東京の夜だと云つた。東京の夜は気取り過ぎるし「夜」ではあまり個性がなさ過ぎるので自分は「歯車」と云ふ題を薦めて見た。彼は即座にペンを取上げてさう直した。さう云ふ因縁もあるせゐか自分はこの作を彼の作中第一のものと思つてゐる。

佐藤の提案した題には、閃輝暗点という眼科的症状をはじめとする己を責める神経衰弱的、統合失調症的病状への苦痛に力点を置いた命名であった。が、〈滅び〉と〈死〉への道行きを描いたテクス

トの原題は、「ソドムの夜」だった。葛巻義敏に「この「歯車」の真原稿には、最初「東京の夜」、続いて「夜」、「ソドムの夜」等の題字が見られる」[15]との証言があり、日本近代文学館蔵の自筆原稿が閲覧可能となって、「ソドムの夜」が原題として確定できるに至った。わたしの編集した『新潮日本文学アルバム　芥川龍之介』[16]は、巻頭に差し入れの形で、松屋製二〇〇字詰原稿用紙に書かれた「歯車」の原稿冒頭二枚を写真版で載せている。この資料からも十分判読できるが、芥川はまず「ソドムの夜」と原稿用紙の二行目に書いている。次に「ソドム」の部分を消して、原稿用紙一行目に「東京」と書き、題を「東京の夜」とし、さらに「東京」を消して「夜」一字とし、さらに今一度手を入れ、二行目の左空き部分から三行目にかけて「歯車」と書いているのが確認できる。

原題「ソドムの夜」は、芥川龍之介晩年の苦渋な歩みを象徴した題名であった。五年前の大震災・大火災で東京の〈ソドムの夜〉を体験していた芥川は、いま、自身が精神的にそこに陥っていることを自覚する。彼は己の生涯が絶対者の審判に耐えないことを察知する。それは「歯車」の主人公の心情と重なる。「歯車」の主人公「僕」は、自身の「墜ちた地獄」を感じる。それゆえ「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん」という祈りがおのずと唇にのぼるのである。「歯車」は主人公の「墜ちた地獄」の記録であり、東京をソドムに擬して、そこからの脱出が不可能な罪人の告白が読み取れるテクストなのである。

四　構成と内容

全六章から成り立つ「歯車」は、主人公「僕」の心象風景である。いわゆる「「話」らしい話のない小説」と言ってよい。語り手は「僕」という人物である。テクストは「僕」という主人公が、東海道線のある停車場へ、その奥の避暑地から自動車を飛ばしている場面から語り出される。「僕は冬の西日の当つた向うの松山を眺めながら、」同乗の理髪店の主人と話をしている。時は冬、芥川作品に多い「日暮れからはじまる物語」[17]（平岡敏夫）の一つでもある。「僕」は主人から「レエン・コオトを着た幽霊」の話を聞く。レエン・コオトは、以下しばしば主人公の意識を占有する。最初の章「一　レエン・コオト」は、「レエン・コオト」がライトモチーフとなっている。「レエン・コオトを着た幽霊」「レエン・コオトを着た男」というようにレエン・コオトという表現が、六回も用いられている。

まずは東海道線の一駅での情景、――「待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた」にはじまる。次に汽車から降り、省線電車に乗り換え、偶然会ったT君という友人と話をしていると、「レエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろ」す。そして「僕」がT君と別れる時には、「いつかそこにゐなくなつてゐた」とある。「僕」は宿泊先のホテルへ歩いて行く時に、視野のうちに「妙なものを？――と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の歯車」を見る。「僕はかう云ふ経験を前にも何度か持ち合せてゐた。歯車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまふ」と続く。前述のように、これは閃輝暗点という眼科に属する症状である。歯車現象は頭痛ともかかわっていたことも書き込まれる。

「僕」はホテルでの結婚披露宴に参加し、とっておいた部屋に籠もる。その後再びロビイへ行き、隅の椅子に座わると、寒中だというのに「レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に

如何にもだらりと脱ぎかけて」あるのだ。姉の夫の事件を知らせる姉の娘から電話がかかってくるのは、このすぐ後のことである。季節はずれのレエン・コオトは、不吉な事件の前触れとして用いられている。レエン・コオトは一の章にとどまらず、全編を支配する。「一　レエン・コオト」の最後は以下のようになっている。

> 僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れてゐない或田舎に轢死(れきし)してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこにか鳥でも飼つてあるのかも知れない。

事実と象徴や暗示が混在した文章である。姉の夫が田舎に轢死したこと、「僕」がいまも同じホテルで短篇を書き続けているのは事実、レエン・コオト、翼の音などは象徴や暗示である。「歯車」は、きわめて計算された構成を持つ。再び言う。レエン・コオトは一の章にとどまらず、全編を支配する。

レエン・コオトをライトモチーフとした一に続く「二　復讐」では、〈罪〉や〈死〉の問題が取り上げられる。それは主人公「僕」の直面する大きな課題とされている。この章でも無気味な「暗号」による不安と怖れで揺れる主人公の心理が扱われる。その一生のカリカチュアをトルストイの*Polikouchka*の主人公に読み取り、「彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生のカリカテュアだつた」と語り手の「僕」は言う。「僕」は自身の「墜ちた地獄」を感じ、「神よ、我を罰し給へ」という祈りが自然に唇にのぼるのである。次に「僕」は姉の家へと急ぐ。途中愛読者に「A先生」と声をかけられ、不快に感じる。「先生、A先生、――それは僕にはこの頃では最も不快な言葉だつた。僕はあらゆる罪悪を犯してゐることを信じてゐた」――ここには神の前にひざまずく小さな人間がいる。罪を自覚し、許しを神に乞う人間が、……。

姉の家を見舞った「僕」は、死んだ義兄も「僕のやうに地獄に堕ちてゐたことを悟り」出す。姉の家を辞した「僕」は、次に青山の墓地に近い精神病院へ行く。「僕の一生も一段落のついたことを感じない訳には行かなかつた」とは、「僕」の率直な感想である。ホテルに戻ろうとすると、「レエン・コオトを着た男」が給仕かと見間違えた自動車掛りと喧嘩をしている。「僕」はホテルに入らず、近くの銀座の本屋へ行く。

主人公の「復讐の神―或狂人の娘」とのかかわりや犯した罪は、「三　夜」で、語り手「僕」の苦い反省とともに語られる。この章は、「僕」が丸善の二階の書棚に本を眺めているところからはじまる。「或阿呆の一生」の「一　時代」とも重なる主人公の精神的風景を扱う。彼はストリントベルグの本を手にし、二、三ページずつ読むが、「僕の経験と大差ないこと」が書かれている。テクストには続けて「のみならず黄いろい表紙」（注、傍線筆者）をしていたとある。

「歯車」を読み解くためのいくつかのキーワードの中に色彩語のあることは、すでに諸家によって言及されている。特に黄色は宮坂覺の言うように、「意識的に書き込まれている」[18]のである。そういえば二の章では、往来でタクシーを待つが、たまに通るのは必ず「黄いろいタクシイ」である。「この黄いろいタクシイはなぜか僕に

交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた」のであり、主人公は「緑いろのタクシイ」を待つ。また本屋で手にした『希臘神話』という本は、「僕をつけ狙つてゐる復讐の神」のことを書いており、それが「黄いろい表紙」をしている。「三」の章では、「僕」をいっそう憂鬱にするような悪徳の話をする先輩の彫刻家の耳の下には、「黄いろい膏薬」が貼ってある。「五　赤光」の章には、「あなたの「地獄変」は……」という文面で「僕」を苛立たせる「知らない青年」の手紙が「黄いろい書簡箋」で書かれている。

黄色という注意信号は、「六　飛行機」の章にも現れる。主人公を憂鬱にする烈しい響きをたてて舞い上がる飛行機は、「翼を黄いろに塗つた」単葉機なのである。黄色の対極には、緑色が意識されている。「緑いろの車」や「緑いろのドレス」、さらには郷愁の光景としての「松林」が取り上げられる。

夕闇の迫る中で主人公は、「突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難」する。「僕」はカッフェで、自作の「侏儒の言葉」の中の「人生は地獄よりも地獄的である」ということばや、「地獄変」の良秀という画師の運命などを思い出し、その記憶から逃れるためにカッフェを出、ホテルへ戻って、偶然会った先輩の彫刻家と部屋で話すことになる。先輩との話は憂鬱に満ちたもので、彼が帰った後は、「復讐の神」としての「狂人の娘」の幻影におびえる。

「四　まだ？」の章は、「僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雑誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滞在費にも足りないものだつた。が、僕は僕の仕事を片づけたことに満足し、何か精神的強壮剤を求める為に銀座の或本屋へ出かけることにした」にはじまる。神の審判におびえ、ソドムからの脱出を願う主人公の「僕」は、仕事場としてのホテルに落ち着けず、東京の街々をさまよう。

「歯車」を論じた寺横武夫に、「歩く人――これが「東京の夜」の主人公を具体的に規定し得る基本条件」[19]という指摘があるほど、主人公は絶えず何かに追われ、見つめられ、つきまとわれて東京の街々を歩き続けるのである。彼は本屋で『アナトオル・フランスの対話集』と『メリメェの書簡集』を買い、あるカッフェへ入って読む。「僕」は読書家で、西洋文学に通じている。いや、「影響を受け易い」のである。

彼はまた往来を歩きながら、「高等学校以来の旧友」に遭う。今は「応用化学の大学教授」である旧友は、結膜炎で「片目だけまつ赤に血を流して」いた。旧友とは「僕」の書いた「点鬼簿」の話などをしたのち別れ、ホテルに戻る。結膜炎の赤は、次章「五　赤光」の伏線ともなっている。もっとも、これまでも二の章の「火事」や三の章の「大火事」「炎」と赤の連鎖は続いていた。「火事」や「炎」は、〈滅び〉や〈地獄〉と連動する。それが「五　赤光」に及ぶのである。五の章はかなり力の入った章である。一気に書き上げたのであろう。前述の作者脱稿日付に従うなら、一日で書いたことになる。それは「僕は実際鼹鼠（もぐらもち）のやうに窓のカアテンをおろし、昼間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行つた」という状況の中で成されたものであった。この後で詳しく述べるが、執筆の場のモデルは、帝国ホテルの一室である。

佐藤泰正に「第五章「赤光」こそは、この作の最も核心的な部分だということが出来る」[20]との見解がすでにあるように、本章は大事

な章である。赤のイメージが、他の章をしのぐほど強烈だ。ソドムの夜からの脱出が強く期待された章といえる。冒頭の「日の光は僕を苦しめ出した」の一文に、救いへの強い願いが込められている。

「或東かぜの強い夜、」と語り手の「僕」は言った後、「それは僕には善い徴だつた」とする。これは「東かぜ」に対する西風を西洋の世紀末思想に見立ててのさや当てなのだろう。あまりに西洋文学を取り入れ盾とした日本の文壇を、自らの反省も込めて語っているかのようだ。主人公は地下室（ホテルの）を抜けて往来へ出、「或聖書会社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈祷や読書に精進」する老人を訪ねる。この老人はこれまでの芥川研究が明らかにしてきたように、芥川の生家新原家の耕牧舎に勤務したことのある室賀文武という俳人がモデルである。室賀は内村鑑三に師事したキリスト教信者であった。「僕」はこの老人と屋根裏の壁にかかった十字架の下で、「なぜ僕の母は発狂したか？　なぜ僕の父は事業に失敗したか？　なぜ又僕は罰せられたか？――」などを話し合う。また、次のような対話を交わす。

「如何ですか、この頃は？」
「不相変神経ばかり苛々してね。」
「それは薬では駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」
「若し僕でもなれるものなら……」
「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば……」
「悪魔を信じることは出来ますがね。……」
「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」
「しかし光のない暗もあるでせう。」
「光のない暗とは？」

僕は黙るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異なるのは唯かう云ふ一点だけだつた。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。……

右の対話からすると「僕」も「老人」も、ともに「暗の中」を歩いている。が、両者の違いは「光」の存在を信じるか否かにあった。「老人」との間に「越えられない溝」を感じた主人公のわびしさを語り手はしっかりと書きとどめている。「僕」は老人との考え方の溝を埋めようと、老人の書棚にあったドストエフスキー全集から『罪と罰』を借りてホテルへ戻ることにする。「僕は努めて暗い往来を選び、盗人のやうに歩いて行つた」とある。以下、ソドムの夜のような場面が語られる。「盗人のやうに歩」く「僕」は、あるバアに入ろうとする。ここに「赤い光」をめぐる場面が展開する。テクストから引用しよう。

――狭いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に芸術家らしい青年たちが何人も群がつて酒を飲んでゐた。のみならず彼等のまん中には耳隠しに結つた女が一人熱心にマンドリンを弾きつづけてゐた。僕は忽ち当惑を感じ、戸の中へはひらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に揺れてゐるのを発見した。しかも僕を照らしてゐるのは無気味にも赤い光だった。僕は往

来に立ちどまつた。けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。僕は怯づ々々ふり返り、やつとこのバアの軒に吊つた色硝子のランタアンを発見した。ランタアンは烈しい風の為に徐ろに空中に動いてゐた。……

「赤い光」はこれまた次に出て来る斎藤茂吉の歌集『赤光』の伏線となっているのは明らかである。同時にそれはヨーロッパ世紀末思想とかかわるものとみてよいのだろう。「僕」は傷んだ神経を「常人のやうに丈夫」にするために、どこかへ行かねばならなかった。「マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、……」――主人公は旅を好んだ。疲れを癒してくれるであろうこれらの都市がクローズアップされる。

東京の暗い往来を歩く「僕」は、養父母の家を思い、子どもたちを思う。「しかし僕はそこへ帰ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた」と語り手は語る。「僕」は「愛し合ふ為に憎み合」う家族のことや、そうしたしがない人間生活を考えながらホテルへ帰る。ここまでくれば、もはやテクストが芥川龍之介の〈現実の転位〉であることは自明のこととなる。やり切れない人間生活、「愛し合ふ為に憎み合」うとはなんたる悲劇か。関東大震災の惨劇は、いまや自身の生涯における内面の惨劇として眼前にあるかのようだ。

ホテルに戻った彼は、外出中に購入した『メリメェの書簡集』に目を通し、『アナトオル・フランスの対話集』を読みはじめる。メリメは暗の中を歩き、フランスは「やはり十字架を荷つてゐた」と「僕」は思う。これらに対比するかのように志賀直哉の『暗夜行路』が、続いて斎藤茂吉の『赤光』が持ち出される。甥からの便りの中に「歌集『赤光』を送りますから……」ということばがあり、「僕」は打ちのめされる。

『赤光』（東雲堂書店、一九一三・一〇）は、若き芥川龍之介のあこがれ、尊敬の対象の書であった。「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳屋の母は死にたまふなり」の一首をとりあげても、強靱な精神が横溢している。そこには東洋と西洋の精神を豊かに取り入れ、バランスを保たせた自然があった。芥川はそれに早くから気づき、あこがれの目を注いでいたのだ。「僻見」中の「斎藤茂吉」の項（『女性改造』一九二四・三）には、以下のようにある。

近代の日本の文芸は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした独自性の表現に志してゐる。苟くも日本に生を享けた限り、斎藤茂吉も亦この例に洩れない。いや、茂吉はこの両面を最高度に具へた歌人である。正岡子規の「竹の里人」に発した「アララギ」の伝統を知つてゐるものは、「アララギ」同人の一人たる茂吉の日本人気質をも疑はないであらう。

斎藤茂吉は一八八二（明治一五）年五月十四日の生まれなので、芥川より十歳年上になる。芥川は茂吉に東西の問題を悠々と乗り越えた、類いまれな巨人、すぐれた歌人を発見していた。「歯車」の主人公は、そうした茂吉の強さ、赤い炎のような輝く姿に目をみはり、おそれの気持ちさえ懐いていたのである。『赤光』には「人工の翼」ではない、東洋と西洋の精神を豊かに摂取しながらバランスをとった、たくましい〈自然の翼〉があった。ここにきて『赤光』

は、「暗夜行路」と同様、「恐ろしい本に変りはじめた」のである。

「僕は僕の部屋へ帰ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだつた。が、そこへはひることは僕には死ぬことに変らなかつた」と語り手は言う。ここに至って主人公と語り手はむろんのこと、書き手である芥川龍之介が一体化する。テクストとしての客観性を保ちながらも、そこに書き手のやり切れない現実が〈転位〉される時、テクストは緊張感を帯びる。その箇所を引用しよう。

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだつた。しかし、催眠剤はいつの間か一包みも残らずになくなつてゐた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪へなかつた。が、絶望的な勇気を生じ、珈琲を持つて来て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、――原稿は見る見る出来上つて行つた。僕はこの小説の世界を超自然の動物に満たしてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像画を描いてゐた。

テクストを通しての、書き手の悲痛な叫びが聞こえるかのようである。実際ここでの「僕」は、現実の書き手、芥川龍之介と重なるものがある。

睡眠薬なしでは眠れない日々、コーヒーで頭を活性化させての執筆、さらに衰えた身体に加え、義兄西川豊の自殺事件とその後始末、――これらが厖大な執筆エネルギーとなっていること。そして「超自然の動物に満たし」た小説（「河童」）が、「見る見る出来上つて行つた」こと。さらには、そこに出て来る一匹の河童（トックが相当する）に、自身の肖像画を託したことなどである。詳しくは小論「「河童」を読む」[21]を参照してほしい。

「歯車」最終章「六　飛行機」は、「一　レエン・コオト」とは逆に「東海道線の或停車場」から奥の避暑地へ自動車を飛ばす主人公がいる。小説「歯車」の構成は、実に的確で一と六の章は、見事な対照を示す。また「六」の章にも、「運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひつかけてゐた」とある。「歯車」は一見構想や筋がないようながら、こうした首尾照応や巧みな伏線があり、文体は細かに計算されている。色彩への特別な肩入れ、四の章に見られたモオル（mole もぐら）という英語から、フランス語の「ラ・モオル――死」ということばを連想し、「死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた」という大事な一文を導くなど、周到な配慮が見られる。

「六　飛行機」の章には、半面だけ黒い犬、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキー、外国人のネクタイが黒と白、さらに訪ねた妻の実家で、飼われている白いレグホン種の鶏に対し、足もとにいる黒犬を見る。白と黒の対比、「ブラック・アンド・ホワイト」の謎を気にするのである。モデルとなった避暑地は神奈川県の鵠沼で、妻文の実家のある地でもあった。東京よりも閑静であるが、ここも「世の中」であり、さまざまな事件も起こっていた。「僕は僅かに一年ばかりの間にどのくらゐここにも罪悪や悲劇の行はれてゐるかを知り悉してゐた」と語り手は言う。「墜ちた地獄」の再確認である。次に「僕」と妻の弟による「僕」の性格をめぐる興味深い会話が差し挟まれる。

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずゐぶん烈しいし、……」
「善人かと思へば、悪人でもあるしさ。」
「いや、善悪と云ふよりも何かもつと反対なものが、……」
「ぢあ大人の中に子供もあるのだらう。」
「さうでもない。僕にははつきりと言へないけれど、……電気の両極に似てゐるのかな。何しろ反対なものを一しよに持つてゐる。」

わたしはかつての論[22]で、「この二項対立がつり合いをとって存在する時はいいが、そのバランスのくずれる時に悲劇の生じることは百も承知で、作者はこの結末部分を綴っていく」と書いた。ここには、いわゆる「中庸の精神」が意識されているのだ。が、彼はその立場に安住し得ない。調和、バランスを失わせるもの、Daimon（悪）に惹かれているのである。

前述のように、首尾照応をはじめ、対応・連鎖・伏線の効果を最大限に利用して、物語は終局へと向かう。主人公の神経は高ぶる。「中庸の精神」は失われ、「不安」は高潮に達する。その箇所を引用する。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な歯車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた。歯車は数の殖ゑるのにつれ、だんだん急にまはりはじめた。同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……

ここには神の審判が意識されている。松林は中庸の世界である。が、「僕」はそこに留まることは出来ない。この後書かれる「西方の人」「続西方の人」での「永遠に超えんとするもの」と「永遠に守らんとするもの」との二律背反に苦しむ者の姿が、先取りされている。「最後の時の近づいたこと」を知り、「頸すじをまつ直にして歩いて」いく主人公は、もはや立ち止まろうとしても、「誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた」という。それは苦しい闘いだ。それだからこそ最後の「誰か僕の眠つてゐるうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？」という一文が、何ものにも代え難い重みを持つ。いま語り手の背後にいる芥川龍之介は、静かに神の審判を待っているのである。

五　帝国ホテル

一九二七（昭和二）年の年始から芥川龍之介が仕事場に用い、「歯車」を執筆したのは、東京の有楽町駅に近い帝国ホテルであった。「歯車」の「一　レエン・コオト」に、「僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた」とあり、以後常に登場するホテルである。わたしは小著『芥川龍之介とその時代』[23]に、晩年の芥川の仕事場となった帝国ホテルとその斡旋をした平松ます子（戸籍上はます、麻素子・万寿子とも書いた）のことをかなり書き込んだ。平松家遺族の証言を出来るだけ入れての記述であった。詳しく

はそれを参照していただきたい。ここではその後、ご遺族の斎藤理一郎氏からうかがったり、原稿用紙五束にまとめられた氏の未完の文章を贈られたりしているので、それら資料をもとに、「歯車」執筆中の芥川と帝国ホテルとのかかわりを再度考えることにしたい。

芥川文に「帝国ホテルは、ます子さんのお父さんの関係で一室を借り」ることができたとの証言がある。[24]「ます子さん」とは、文の幼なじみで、当時龍之介の助手のような仕事を任されていた右の平松ます子のことである。ます子は一八九八（明治三一）年二月七日、東京市芝区下高輪町（現、港区高輪）五十三番地に生まれた。龍之介より六歳年下、文より二歳年上ということになる。父平松福三郎は明治法律学校を出た弁護士で、有楽町三丁目に法律事務所を兼ねた公証人役場を開いていた。場所柄もあって事務所はいつも繁盛していたという。

ます子は裕福な家に生まれ、育ったことになる。龍之介の妻となった文（旧姓塚本文）も若き日、同じ芝区下高輪町の東禅寺の脇にあった家に住んでおり、二人は家が近いこともあって遊び仲間であった。『追想 芥川龍之介』には、「平松ます子さんは、その当時からの遊び友達でした。ます子さんの家は東禅寺のすぐ近くでした。／東禅寺は立派なお寺で、境内が大変広く、私達子供には良い遊び場でした。／わびすけ椿の咲いた墓地は、美しく掃除もゆきとどき、私はます子さんの弟妹とも、この墓地でよく遊びました」と出て来る。

ます子の父福三郎は子福者であった。園子・英彦・泰彦・ます子・利彦・豊彦・義彦・たよ子・定彦と確認できる名があげられる。早世した子も加えると、七男四女であったという。後年ます子の名誉回復に乗り出した斎藤理一郎氏は、たよ子の子である。ます子は二女である。母こうは体が弱かった。それに長女の園子が早く結婚し、家を出ていたこともあって、ます子は自然弟妹の面倒を見る立場に立たされた。東京女学館卒業後は家事に専念、病気のこともあって婚期を逃すことになる。

一九一九（大正八）年に父福三郎は、出口王仁三郎の大本教に入信する。大本教は鎮魂帰神という神がかりの法を採用、新聞雑誌を買収し、知識人を加入させるなどして、第一次世界大戦中に大発展を遂げていた。そうした流れの中で、平松福三郎は弁護士の職を投げ捨て、東京支部長という要職に就く。その後彼は子どもたちを東京に残し、妻こうと二人して大本教教団の本拠地、京都府の亀岡へ移り住む。残された一家の面倒を見たのが、ます子であった。彼女に結核の兆候が現れたのは、この忙しい最中であった。

芥川龍之介と平松ます子が親しい交流をするのは、龍之介の最晩年のことである。当時、ます子は関東大震災で高輪の家が焼けたため、長兄英彦の住む田端に身を寄せ、弟妹の面倒をみるかたわら、短歌や俳句を詠んだり、染色を習ったりしていた。そうした折りに幼なじみの文と再会、芥川家の子どもたちの面倒や、龍之介の創作の相談にのってほしいと文に頼まれ、芥川家に出入りするようになっていたのである。文は賢い妻であったが、夫の原稿を読み、意見を言うとか、誤字を指摘するというようなことは、不得手であった。文はその役割を文学好きのます子に期待し、夫の書斎に積極的に迎え入れることになる。ます子にとっては、人気作家の書斎に出入りできることは、刺激的で、日常生活からの解放感を得ることでもあった。ます子は家庭的なところがあったから、芥川家の老人や子どもからも慕われたに違いない。彼女は文の家事の手伝いまでした。ま

す子は芥川家全体とのかかわりで、龍之介に接近したのである。そして最後は、その仕事場の確保に携わることで、芥川最晩年の輝きを演出したことになる。

一九二七（昭和二）年一月から二月にかけての約二か月、芥川龍之介は帝国ホテルを仕事場とした。ます子の斡旋であった。先に引用したところだが、芥川は「歯車」の「四　まだ？」の章に、「僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雑誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滞在費にも足りないものだつた」と書いていた。これは誇張ではなく事実である。当時の帝国ホテルは、支配人犬丸徹三の積極的経営もあって、世界的に知られたホテルに成長していた。それゆえホテルの宿泊料は高かった。当時の値段で最低一泊シングルで八円、ダブルで十四円という記録がある。他に食事代が朝食二円、昼食三円、夕食四円である。東京の一流旅館でも、食事込み五円の時代である。交通に便利で、来客や雑事に煩わされることもなく、落ち着いて執筆に打ち込めるといっても、龍之介には当然宿泊費の懸念があったはずだ。何せ義兄の残した負債は大きかった。「年三割と云ふ借金（姉の家の）のことも考へなければならず」（斎藤茂吉宛、一九二七・二・二付）という状況である。その対策を考える身で、一流ホテルに滞在して原稿を書くなどの余裕があるはずがない。

先にも記したが、ます子の父平松福三郎は公証人役場を、帝国ホテルに近い有楽町で開いていた。羽振りのよかった時代の福三郎は、帝国ホテルを商談などでも利用したに違いない。当然、犬丸徹三とも昵懇の間柄であった。平松ます子を通して帝国ホテルと芥川との結びつきの縁が、ここにあったのである。わたしはます子の甥、斎藤理一郎から『新潮日本文学アルバム　芥川龍之介』の記述の不備を指摘されたのが機縁で氏と懇意になり、晩年の芥川とます子にかかわるさまざまな情報を得ることになる。芥川と帝国ホテルに関しても、教えられることが多かった。帝国ホテルの客室係をしていた竹谷年子を一緒に訪ね、インタビューまで行った。彼女が『客室係から見た帝国ホテルの昭和史』（主婦と生活社、一九八七・一一）という本を出された数年後のことである。

竹谷年子の直話には、外部の人間には分からないことが多く、参考になった。驚くべきことの証言の一つに、帝国ホテルでは、「クリスマス後の一、二か月は空き部屋が多いので、外国賓客などはタダで泊めていました」というのがあった。犬丸鉄三の義侠心というよりも商業政策である。芥川の場合もこのケースであった。高名な作家、しかも親しい平松福三郎のお嬢さんの紹介ときては、断る理由はなかったのではなかろうか。むろん、食事は出ない素泊（すどま）りである。なお、出入りは正面玄関ではなく、脇の地下室に通じる入口（従業員専用）からという芥川側の条件があった。他の客に目立つことなく、執筆に専念するためであった。これも斎藤理一郎の直話では、食事はすべて平松ます子が近くで買う弁当で済ませたという。高価なホテルの食事代の倹約と、原稿を書くための時間の節約という二つのねらいがあったのである。なお、当時の芥川書簡は、すべて田端発となっているが、帝国ホテル滞在を隠すため、わざわざます子が田端に運び、投函したものと思われる。

「歯車」の「五　赤光」の一節に、「或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徴（しるし）だつた。）僕は地下室を抜けて往来へ出」とある。また、小穴隆一の回想記『二つの絵　芥川龍之介の回想』[25]にも、ます子

に案内されて「有楽町の駅で降りると、有楽町の家に帰らずに、僕を案内して、正面の入口からでなく、側面の小さい出入口をえらんでそこから僕をホテルに導いていれた。（僕はよく勝手を知つてゐる麻素子さんを一寸疑つたが、あとで芥川から彼女の父がホテルの支配人とは知合ひであると説明された。）」との記事がある。これらの記述からも、帝国ホテル滞在中の芥川は、人に知られぬよう振る舞うため、地下室に通じる入口を利用していたことがわかる。

かくて芥川龍之介は、平松ます子の配慮によって与えられた仕事場、帝国ホテルの一室で最後の輝きを示す作品を次々と書き上げることとなる。芥川龍之介の自殺未遂事件と平松ます子のことは前著『芥川龍之介とその時代』にくわしく書き込んだので、ここでは繰り返さない。ただここで再確認しておきたいことは、平松ます子はこれまで通説とされたような芥川自殺未遂事件の共犯者などではなく、斎藤理一郎や平松定彦[26]ら遺族側が指摘するように、〈阻止役〉として存在したということである。芥川龍之介生誕百年前後からの遺族側のます子の名誉回復を願う強い働きは、晩年の芥川伝を修正するまでになる。

「歯車」は帝国ホテルを仕事場として成った芥川の小説であった。「歯車」ばかりではない。「河童」をはじめとする厖大な量のテクストがここで生産されたのである。平松ます子は帝国ホテルにいる芥川に張り付き、原稿を書かせ、その死への願望を阻止するため働いた。「芥川は帝国ホテルの客ではなかったのです。ます子によって幽閉された囚人でした」との斎藤理一郎のことば（直話）は、近親者の直観によってはじめて把握される考えであったのかもしれない。

心身の衰弱を自覚しながらも、姉一家の経済的苦境を救い、田端の家を守り抜くにも、芥川龍之介は売文の業を中止出来なかったのである。たとえ〈幽閉〉であるにしろ、創作に没頭できる場が与えられたことを素直に受け入れ、芥川は書くことに集中した。やり切れないほどの重荷は、執筆エネルギーとなって彼を駆った。〈現実の転位〉としてのいくつものテクストが、かくして生まれた。「歯車」は、その中でも質量ともにすぐれたものであった。衰えたとはいえ、さまざまな技巧をこらした一級のテクストが、ここに誕生したのである。

村上春樹に「『歯車』という作品の中には、自らの人生をぎりぎりに危ういところまで削りに削って、もうこれ以上は削れないという地点まで達したことを見届けてから、それをあらためてフィクション化したという印象がある。すさまじい作業である。「自分の肉を切らせて、相手の骨を断つ」という表現があるが、まさにそれだ」との評がある。そこには、芥川の人生の総決算が託されていたのである。

注

1　関口安義「「歯車」―〈滅び〉への道の記録―」『信州白樺』第47・48合併号、一九八二年二月一日、のち、『芥川龍之介　実像と虚像』洋々社、一九八八年一一月一五日収録

2　関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、一九九九年三月二〇日

3　黒古一夫監修・唐東元著『日本近現代文学の中国語訳総覧』勉誠出版、二〇〇六年一月二〇日

4　嶌田明子「著作外国語訳目録」関口安義編『芥川龍之介新辞典』

翰林書房、二〇〇三年一二月一八日収録

5 *Rasyomon and Seventeen Other Stories* PENGUIN CLASSICS ペンギン社、二〇〇六年三月、『芥川龍之介短篇集』新潮社、二〇〇七年六月三〇日収録

6 葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』岩波書店、一九六八年二月一三日

7 芥川文述・中野妙子記『追想 芥川龍之介』筑摩書房、一九七五年二月一五日

8 芥川瑠璃子『双影 芥川龍之介と夫比呂志』新潮社、一九八四年二月二五日、同『影燈籠 芥川家の人々』人文書院、一九九一年五月一〇日

9 『大正大震災大火災』大日本雄弁会講談社、一九二三年一〇月一日

10 川端康成「芥川龍之介氏と吉原」『サンデー毎日』一九二九年一月一三日

11 駒尺喜美『芥川龍之介の世界』法政大学出版局、一九七二年一月一日

12 椿八郎「「歯車」と眼科医」『文藝春秋』一九六三年三月一日、のち『鼠の王様』東峰書房、一九六九年六月五日収録

13 松本清張「芥川龍之介の死」『昭和史発掘2』文藝春秋新社、一九六五年九月五日

14 佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」『改造』昭和三年七月一日、のち『わが龍之介像』有信堂、一九五九年九月一五日収録

15 注6に同じ

16 関口安義編『新潮日本文学アルバム 芥川龍之介』新潮社、一九八三年一〇月二〇日

17 平岡敏夫『〈夕暮れ〉の文学史』おうふう、二〇〇四年一〇月二五日、同『夕暮れの文学』おうふう、二〇〇八年五月二〇日

18 宮坂覺「「歯車」―〈ソドムの夜〉の彷徨―」『國文學』一九八一年五月二〇日

19 寺岡武夫『歯車』菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介研究』明治書院、一九八一年三月五日

20 佐藤泰正「「歯車」論―芥川文学の基底をなすもの―」梅光女学院大学『国文学研究』一九七一年一一月、のち『文学 その内なる神』桜楓社、一九七四年三月五日収録

21 関口安義「「河童」を読む―龍之介の生存への問いかけ―」『都留文科大学研究紀要』第70集、二〇〇九年一〇月二〇日

22 注1に同じ

23 注2に同じ

24 注7に同じ

25 小穴隆一『二つの絵 芥川龍之介の回想』中央公論社、一九五六年一月三〇日

26 平松定彦は、平松ます子の末弟。その証言は『週刊朝日』一九八六年八月二九日号のスクープ「芥川龍之介が「自殺へのスプリング・ボオド」に選んだ幻の女性」に見出せる。

27 村上春樹「芥川龍之介―ある知的エリートの滅び―」ジェイ・ルービン編『芥川龍之介短篇集』新潮社、二〇〇七年六月三〇日